
即興短編集！

ゴウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

即興短編集！

【Nコード】

N24600

【作者名】

ゴウ

【あらすじ】

その名の通り、何かふと思いついたものを書く小説です。

その為、表現が至らない部分があるとありますが、ご了承ください。そして、タイトルが似ていても、関連性の無いものばかりです。ほとんどが一話完結型の短編とお思いますが、結構です。

さらには、ジャンルもめっちゃめっちゃ。案の定、更新も不定期。残酷描写もあるものとなないものがあります。（有るものには○をつけます。）

そんな小説ですが、どうぞお読みください（汗）

煉獄少年 — K a t h a r t i r i o — ○（前書き）

さあ、始めました。

一体連載小説をいくつにすれば気が済むんでしょうね（汗）

さてさて、早速一話目から説明が難解な部分があります（オイ）
理解できない部分があった場合、質問は受け付けますよ。その後の話も同様です。

そして、残酷描写が一話目から……。苦手な人、すみません（汗）
というか、次の話もその方向性になってしまっているのであしからず（汗）
そんなこんなで、どうぞ！

煉獄少年 — K a t h a r t i r i o — ○

時は今から何十年か後のこと。

その時代、日本は荒^{すさ}んでいた。

いつの間にか犯罪発生数が世界一になり、検挙者数も数倍に膨れ上がっている。しかし、それでもまだ犯人達は国に蔓延^{はびこ}っているのだ。

そんな陰気な国で最も危険な場所は、路地裏。

誰も通らないような場所に限って、犯罪というものは起きやすいものだ。

その路地裏の一角では、2人の人間が対峙していた。

1人は、長い金髪の少女。15歳くらいでさっき人殺しをしたばかりですと言わんばかりの返り血を白い服に浴び、右手にはナイフを持っている。そして、狂った笑みを浮かべ、今にももう1人の人間を殺そうとしている。

そして、もう1人は黒いマントを身に包んだ少年だった。顔立ちはあまりぱっとしないが、そんなに格好よくないというわけでもない。いわば中間だ。

ここまでは普通だが、異常な点がいくつかある。

まず、人間には決して有り得ない、ましてカラーコンタクトのものでもない『赤い』瞳でじつと少女を見据^はえていて、黒い手袋を両手にはめ、裸足^{はだし}という格好だ。

そして、そんな状況で開口一番に少女が、

「し、死ねええええええええええええええええつ!!!!!!」

絶叫し、少年にナイフを構えて身体に突き刺そうとする。

$$\begin{matrix} \top \\ \vdots \\ \circ \\ \bot \end{matrix}$$

少年は、死の淵にいるにも関わらず、微動だにしなかった。そして、ナイフは少年の心臓に刺さる。

ずぶつと。

確かに少女は肉を突き刺す感触を覚えた。

「あはっ、これだから殺しは止められないのよねえ……。」「

とても15歳の少女の口から出る言葉ではない。

それは、この腐りきってしまった犯罪大国、日本を反映しているの
だろう。

しかし、

「……おかじま みき 岡島美紀、15歳。」

なんと、少年は心臓にナイフを刺したまま、本を取り出して淡々とその文字を読み上げる。

「罪状は殺人、回数は124回、重要度は3、動機はナイフを人に刺したときの感触を得るため、要は快樂殺人。この者を裁いてよいことをここに証明す。」

少女、美紀はうろたえていた。そして、様々な思考が交錯する。

何故、殺した正確な回数まで分かる？

何故、殺しの動機が分かる？

何故、ナイフを心臓に刺して死なない？

何故、なぜ、ナゼ！？

美紀は、いつの間にか少年から逃げていた。

とにかく、怖い。

少年は一体何者なのだろうか？

そんなことはどうでもいい。美紀は路地裏を走り回る。

が、次を右に曲がったとき、少年は目の前に立っていた。

「！……くそっ！」

美紀は振り向き、再び逃亡を試みるが、その目の前には少年が立っていた。

「ひ、ひゃあああっ！？」

瞬間移動。

それしか単語が思いつかなかった。

ともかく、心臓にナイフを刺したままの少年は、手袋を外し、右手の素肌を見せる。

その時だった。

その手から真紅の炎が出たのは。

「な、な……。」

美紀は最早、人智を超えた出来事に着いていけなくなっていた。そして、少年は美紀に右手を触れる。当然、美紀の体は燃え上がり始めた。

「きっ、きゃあああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！！！」

苦しみに悶え、体の焼ける音と臭いが自分の体から発せられる。しかし、意識は途絶えず、痛みもまだ感じ続けている。

「がああああああっ、あああああああああああああああああ
あ！！！！！！」

美紀は踊り狂った。

しかも、身の焼ける音、臭いはするのに、一向に燃え尽きることがない。痛みだけを与えられているような感じがする。

その様子を、少年は表情を変えずに眺めていた。

「それは、貴様の与えた苦しみの代価だ。」

少年は冷酷に告げる。

「魂を浄化するための儀式を肉体で行っているのだ。感謝しろ。貴様の魂はそのまま救われるのだから。」

少年は、ナイフを胸から抜き去る。

そこからは、血も出なければ、傷もない。

「まあ、あと数分は耐えてもらうがな。」

「ひゃあああああああああああ!!?」

そして、正に地獄と呼べる数分を経て、美紀の肉体はようやく焼かれ始め、数分後には炭になり、死んだ。

「……喜べ。心臓だけは残してやったからな。これでお前も役に立つてことだ。」

少年は、手袋を右手に嵌め直し、わざと燃え残した心臓を手に取り、コンビニの袋に入れてその場を立ち去る。

少年が帰った場所は、路地裏にぽつんと佇む『Murderer's House』と書いてある店だった。

そこには、1人の会社員が座っていた。

「あ、リオさん！依頼は？」

「任務は完了した。とっとと報酬を払って立ち去れ。」

「はい！」

依頼が完了したことにより、喜びを隠せない会社員は、財布から100円を取り出した。

そして、リオと呼ばれた少年と取引をした。

先ほどの美紀の心臓と、100円を。

話は変わるが、この国には面白い制度がある。

『復讐の原則』……、指名手配犯を殺して心臓を警察に届けると、もちろん懲役付だが報酬がもらえる。それも莫大な量の、だ。

しかし、懲役を免除する方法が1つある。

それは、この少年、カサティ||リオに殺してもらうことである。

何故かりオが殺した犯人の心臓とリオの名刺を見せると、懲役が免除されるのだ。

その理由は、誰も知らない。

ともかく、リオはこういう仕事を請け負っている。だから店の名前も『殺し屋の家』。

「では、気をつけて帰るのだぞ。」

「はい！」

リオは、心臓をバッグに入れた会社員を笑顔で見送った。

「さて、次は誰を殺すのか……?」

リオは、黒いマントを脱ぎ捨て、本を読み始めた。

マントを脱ぎ捨てた下は、厚めの赤い服の袖は肩の辺りで、ズボンの裾は膝の辺りで引きちぎられた後があり、露出した右腕には、『嫉妬』の象徴の蛇、左腕には『憤怒』の象徴の龍の刺青があった。それも、1ページ目のみをだ。

その本の題名は、『U r t e i l』となっている。

そこには、人物の名前と、罪状、その罪を犯した回数、重要度、犯罪の動機、殺す時間が書かれている。

「……ふむ。こいつだな。」

リオはチラッと時計を見た。

現在午前2時。殺しの時間まではあと5時間もある。

「少し寝ておくか。」

そう言うと、リオはマントを毛布代わりにして寝た。

その三時間後、つまり午前5時頃。
訪問者がやってきた。

「あ、あの………?」

その少女は、美紀と同じくらいの16歳だった。

茶色い髪はポニーテールにし、活発な少女を連想させる。

が、この少女は今は何故だか沈んでいた。

しかし、そのような状態で弱弱しい声を出しても、寝ている少年を起こすことなど出来ない。

そこで、少女は大きな声を出してみた。

「あ、あのっ!!」

「……ん?」

黒い毛布に包まった少年は起きた。

リオは目をこすり、ふわあ、と一回欠伸をした後、きよろきよと周りを見渡し、少女を見た。

「何か用か?」

「あの、私、星野恵ほしのめぐみと言います。じ、実は、その……。」

何か言いづらそうにしていた少女、恵だが、勇気を振り絞ってこれだけは言った。

「こ、殺しの依頼をしにきたのですが……。」

確かに、16歳の少女に、『こいつを殺してください!』と軽々しく依頼できるものではないだろう。だから、先程から何か言いづらそうにしていたのだ。

そして、正直、リオがどのような存在なのか知らない恵は結構心配していた。

そんな戸惑いを見せる恵に対して、リオは笑みを浮かべて、

「……用件を聞こう。ここに座れ。」

リオの言葉によって、恵は少し安心したのか、結構綺麗なソファに腰掛けた。

「これが、俺の名刺だ。」

恵がソファに座るやいなや、いきなり名刺を差し出した。

それを、急に言われたので驚きつつも受け取る恵。

そんな恵に構わず話を進める。

「さて、誰を殺して欲しい？ま、この本に載っていればの話だが。」

そして、いきなりこの質問。本当にいきなりだったので戸惑ったが、自分の目的を思い出し、恵は話し始めた。

「……殺してほしいのは、八坂源太郎やさかげんたろうよ。」

その名前を言った途端、リオの持つ本が独りでにページを開けた。

その光景に驚き、恵は言葉を止めてしまうが、代わりにリオが本を読み上げ始める。

「八坂源太郎。34歳。罪状は殺人、罪を犯した回数は623回、重要度は5、動機は世の中の人間への復讐……。」

恵にはなんと言ったかほとんど分からなかったが、源太郎について説明したというのは分かった。

しかし、何故知っているのだろうか？

その疑問をぶつけると、

「それは、この本に書かれているからだ。」

「……？」

その返答を聞いて、当然首を傾げる恵。

その様子を見て、リオが補足する。

「簡単に言うと、裁きを与えるべき対象を神が殺す時間を指定して書いたものだから、名前とかが分かる。ただそれだけだ。」

「でも、神様はその本に直接書く訳じゃないでしょ？」

確かに、恵の反論は尤もだ。

しかし、大して考えもせずにリオは返答する。

「神の書いたことがここにそのままコピーされる。どういう原理かは聞くな。俺も分からないからな。」

まだ納得できない部分はあるが、聞くなと言われて何も言えなくなつた恵は、話題を変えた。

「あ、あの、殺しに、行かないんですか？」

「あ？……ああ、時間じゃないからな。」

と本に目を向けると、あ、と声を出し、

「忘れてた、『繰上げ』をしなきゃな。」

「？」

恵は当然疑問符を浮かべる。

しかし、リオは構わず、持っていた本を宙に投げた。
そして、

「……『八坂源太郎』を初めに持って来い。」

リオはそう本に命令する。

すると、本に書かれていた文字が浮かび上がり、宙を舞って、一番最初のページのあるところへすっと入って消えた。

「……うわー。」

恵は目の前の光景にもはやそれしか言えなかった。

「ん、これであとは『殺しの時間』まで待つだけだ。」

「……ね、ねえ、『殺しの時間』って何なの？」

リオは、少し面倒くさそうにしながらも、その質問に答えてやる。

「ここに載っている人間は裁かれるべき人間だ。しかし、時間を決めなければそれこそ大規模殺戮になりかねないし、魂が一気に天界に流入しても救済できない魂も出てくる。つまり『漏れ』って奴だな。それを防ぐ目的から、神が自ら時間を設定し、その時間に殺すようにこの本に書く。」

「でも、さっきみたいに勝手に変えちゃって良いの？ 殺す時間とか順番とか……。」

「それは『繰上げ』という作業で、ちゃんとした手続きをとれば好きに順番を変えられる。さっきは本を宙に投げて命令したあの行為が手続きとなるわけだ。手続きは、至って簡単な行動でいい。『繰上げ』するという意思さえあればな。」

先ほどから、現実離れな回答ばかりなので、恵も首を傾げている。

「さ、俺は時間まで寝るが、お前は どうする？」

「……どうするもこうするも……。」

恵は顔を真っ赤にして言った。

「お、お腹空いたんですけど……。」

「ああ、それなら冷蔵庫にミミズやらネズミやらがあるから適当につまんでくれ。」

「ええ！？嫌ですよ！！そもそもあなたは何てものの食べてるんですか？」

「因みに生だから、嫌だったら焼くなり煮るなりして食べ。俺は寝るから起こすなよ。」

「……ふええ……。」

反論できないまま、腹の減ったまま残り2時間という長い時間を待ち続けた。

そして、恵にとっては地獄でしかなかった2時間が過ぎた。

この近くにコンビニはないし、そもそもここは犯罪大国日本である。この店から出るなど、自殺行為に等しい。

時間になったので、恵はリオを起こすことに。

「あのー、時間になりましたが……？」

「……んん……。」

リオは眠たげな顔をして起き上がった。

が、それを見た恵は思わず笑ってしまった。

「……どうした？」

「ふふ、だって、髪の毛が、あはははっ！」

「……？」

そう、寝癖が凄かった。

どう凄いかは、ご想像にお任せします。

それはさて置き、リオは寝癖を直して、恵と朝食を食べ（因みに、恵は抵抗しながらも焼きネズミを食べた）殺しに出かけていこうとした。

すると、

「……私も、行かせて下さい。」

「……いや、依頼者を殺させるわけにはいかない。ここで待ってろ。」

「でも！あの八坂が、私の血族を皆殺しにしたあの八坂が殺されるのを見たいのよ！」

恵は正気ではなかった。

八坂を殺して欲しいと依頼しに来た理由は、恵の台詞にあった通り、恵の血族を全員殺したからだ。その後は路上で暮らし、苦悩だらけの生活を強いられた。

その根源ともいえる八坂が殺されるのをどうしても見たいのだろう、

恵は引かなかった。

「……ここで待ってろ。」

「嫌よ……。」

「待っている。」

「命令しないで。」

「……ッ。……待たないと、殺すぞ。」

「……お好きなように。」

「……お前は依頼人なのだから、大人しく待っていれば被害はない。だから待っている。」

「いい加減にして!!」

恵は怒鳴った。

「私は行くの! 行くとしたら行くのよ!!」

子供のように駄々をこねる。

リオもとうとう扱いきれなくなったのか、

「……勝手にしろ。」

「!……あ、ありがとう……。」

そして、黒いマントを背負って、本を持ったリオの背を、恵は追う。

しかし、歩くこと数分、リオと恵は路地裏から出ていた。

「ち、ちょっと……?」

恵は当然止めに入った。

「……何だ?」

「ど、どこ行くの?」

その疑問にリオはさらりと答える。

「ホームセンター。」

「……何しに?」

きょんとした顔の恵にリオが言葉を返してやる。

「いや、まずお前の武器を買わないとならないからな。」

「なるほど……、ってえモガッ!」

恵が驚いて叫ぶが、間一髪でその口をリオが押さえる。

「……あまり大声を出すな、周りに迷惑だし、犯罪に巻き込まれる……。」

その言葉には、ただコクコクと頷くしかなかった。

そしてリオは、大人しくなった恵の手を引いて、ホームセンターへと急いだ。

しかし、恵が言う。

「あの、えっと……。」

「?どうかしたか?」

「い、いえ、何でも……。」

恵は、何故か顔をほんのり赤く染めていた。

それは、久々に触れた他人のぬくもりのせいでもあるし、異性と手を繋いでいるというせいでもあったが、リオはそれに構わずぐいぐいと進んだ。

リオはホームセンターで小さめのナイフを買い、恵のズボンのポケットに入れさせた。
武器を持つのは初めてなのか、かなりおどおどとしていたが、それを見たりオが言う。

「……何かあったらそれで人を殺せ。」

瞬間、恵の背中にぞっと寒気が襲った。

人を殺す、それがどれだけの罪になるかを恵は知っていたからだ。
ましてまだ殺しの経験のない高校生程度の年齢だ。人を殺すのにはまだ抵抗があるのかもしれない。

しかし、リオはそれを見て、恵の頭をごしごしと撫でる。
少々乱暴な行為なのに、なぜか安心感を覚える。
が、

「心配するな、お前が罪を犯す前に俺が殺す。……この手でな。」

リオは自分の恵を撫でる手を見て言った。
恵は、突然その手に恐怖感を覚え、手から逃れるためにしゃがみこんだ。

「?どうした?」

「やっぱり、嫌……。」

恵はなるべく押し殺した声で言う。

「人は、殺したくない……。」

リオはその言葉に、溜め息交じりで返答する。

「何を今更自分勝手なことを。依頼として人を殺すようにお前に言われたし、自分で俺に言ってお前はここまで来たんだ。もう引き下がれないんだよ。」

それに、とリオは言葉を続ける。

「大丈夫だ、お前に罪を負わせるようなことはしない。さっきも言っただろ?」

そう言って、しゃがみこんだ恵の手を強引に引っ張って路地裏へと戻っていく。

さっきの言葉を聞いたための安心感に、路地裏に戻る恐怖を感じるという複雑な心境のまま、また犯罪の宝庫へと戻っていつてしまった。

その路地裏では、ある殺人鬼が人の腕を切り裂いていた。性別は男、頭髮は生まれつきの白色で瞳はカラーコンタクトで緑色にしている。

こんな異様な男、今時町を歩いても見ないだろう。そんな男に追いつめられているのは、二十代の何処にでもいそうなOLだった。ただし、片腕の、だ。

「た、助けてっ……！」

当然、OLは最後の希望に賭けて助けを乞う。
が、男は口元を歪めて言う。

「ダメダメ、俺の食料になる奴がそんなこと言ったらさあ！」

男は手に持つチェンソーでOLの足を切り裂く。

チェンソーの力が強いせいか、骨もガタガタに歪んでいたが一発で身体から切り離れた。

「ぎっ、あああああああああああ！！！！！！！」

OLは苦痛の叫びを上げる。
が、

「うるさいなあ！」

男はOLの首を捉え、絞め始めた。

「がつ、ひゃああ……。」

OLは決して届かぬ声を絞り出すも、息が出来ずに3分くらいで絶命した。

「ひひひ……。」

男は口を歪めたまま、手と足と首を胴体から切り離し、バラバラにしていく。

その度に、辺りと自分の体に血が飛び散る。
そして、一通り事を終えると、ポケットからゴミ袋を出し、次々に様々な形の人肉を入れていく。

その後に、男はとんでもないことを口走る。

「さあって、帰って食うとしますかあ……。」

男は涎を口から垂らしながら、袋を直視した。

彼の名は八坂源太郎。34歳、身長は169センチメートル。

ここ最近新聞に躍り出るようになった連続殺人犯だ。

しかし、遺体は事故現場からは発見されず、凶器も見つからない。
見つかったとしてもどこにでも売っている凶器なので、どこの店で買ったのかも分からない。

さらに、証拠は入念に消しているためか、なかなか見つからず、住居はほぼ不定である為、逮捕するのがもはや困難となっていた。

そんな源太郎の趣味は、殺した人間を食うことである。

もはや武器を買う金すらない源太郎は、食糧難に陥っていた。食料を確保できなければ、いくら腕の立つ殺し屋だって飢えて死んでしまう。

そこで思いついたのは、殺した人間の肉を食うことだった。

そして、手近な人間を殺し、その肉を料理して食べるという猟奇的なことを始めた。

これではまるで、25年も洞窟で人を待ち伏せ、人肉を食した狂気の一族、ソニー・ビーンと同じだ。それと同等のことをやってのける源太郎は、やはり正常でないのかもしれない。

そんな源太郎は、朝食の材料を手に路地裏を歩いていた。どう料理しようか、そうも考えていた。

まさにその時だった。

背後から声が聞こえたのは。

「……八坂源太郎、34歳。」

びくっ、と源太郎は体を震わせる。
そう、源太郎はこの男の声を知っている。
一度、この男の殺し方を偶然にも見てしまったことがあるのだ。
だからこそ、恐怖に体を震わせる。

「やはり貴様か。手っ取り早く済ませる。」

その男は、黒い手袋を外す。
すると、その手からは真紅の炎が。

「うわ、凄い……。」

異常現象に思わず声を出してしまった少女。
しかし、源太郎はそちらの少女をターゲットとしたようだ。簡単に
殺せそうだと思ったのか、朝食の材料として最適だったのかは知ら
ないが。

「ひやはっ、死ねっ！」

源太郎はチェーンソーを電源を入れたまま少女に投げつける。
が、少女の前に少年、リオが立ちふさがり、チェーンソーを腹に受
ける。

その腹からは、血がとめどなく溢れていた。

「あはひやはははははっ！！馬鹿じゃねえの！？馬鹿じゃねえのか
よオオオオオオオオッ！！！！」

源太郎はしばしその姿を見て狂い笑っていた。
また食材が増えたことへの喜びだろう。

が、

「……貴様こそ、馬鹿ではないのか？」

源太郎の笑いが止まる。

「この程度で俺が死ぬと思ったのか？」

チェーンソーを腹から強引に引き抜き、源太郎に返す。

ただ、その投げたスピードが音速を超えていた為、一瞬にして源太郎の腕が1本飛んだ。

ついでに、チェーンソーもバラバラに砕け散った。

「あ、はっ!？」

源太郎は、最初は当然、自分の身に起こったことを理解できなかったが、しばらくして、痛みを感じるようになり、

「アガガガガガッ!?!? アガガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!?!?!」

「痛みを人に与えるのは平気な癖に、自分がやられたらよくもそんなに痛がってられるな。」

リオは、源太郎に近づく。

痛みで顔を歪める醜い男に、真の制裁を加えるために。

「や、やめ、やめろお!来るなああああああっ!」

源太郎は走り去る。

「……命懸けの鬼ごっこか。発想は面白いが、どこまで逃げ切れるか……。」

リオは、源太郎を追うために走ろうとしたが、

そのリオのマントをきゅっと、恵が掴む。

「もう、やめて……。」

それは、16歳の少女にはあまりにも残酷で、ショッキングだった。目の前の光景に耐え切れなかったのか、さっきまでいた場所には吐瀉物もある。

そして、依頼をした自分が間違ってた、と今更ながらに後悔する。

しかし、それに対するリオの返答は、平手打ち。

まだ手袋を嵌めている左手の方で、少しだけ軽めに叩いてやった。

「……だから、来るなって言ったはずだ。」

リオは冷酷な口調で、殴られた頬を押さえる恵に告げていく。

「……お前はどうせ口だけの女なのだな。」

「ううっ……。」

「ここまで来てあいつを殺すな？ ふざけんじゃねえよ。いずれは殺される運命にある奴だから、今殺しても殺さなくても結局いつかは裁きを受けることになる。だが、その『いつか』をわざわざ早めたのは何処の誰だ？ それなら俺の店に来なければ良かったんじゃねえのか？ 本当は生半可な覚悟で俺の店に来たんじゃねえか？ 違うか？」

「……………」

恵は最早、何も言い返せなかった。

「今度こそ言わせてもらう。」

そして、リオは言う。

「帰れ。もう現れるな。」

その短く、だが残酷な言葉に、恵は数秒座ったままだった。が、その後すぐに恵は立ち上がり、今までの礼なのか謝罪の念からなのか知らないが、頭を下げてから立ち去った。

「……。」

リオは、その背中を見て、乞う呟いた。
人を殺し、ほとんど人の感情にさえ触れなかったリオが、こう言った。

「……悪いな……。」

そして、この状況をも生み出した全ての元凶、源太郎を本気で殺しにかかる。

「くそっ！一体どうなってやがる！？」

源太郎は腕の痛みを相当気にしながら走っていた。

痛みによって体力が奪われているのか、息は既に切れていた。

しかし、走らなければ殺される。その考えだけが頭の中で渦巻いていた。

が。

目の前に、泣きじゃくって走る少女を見た。

源太郎は、当然先程の少女だと思い出し、殺しにかかる。

源太郎は、少女に追いつくと、足を引っ掛けて転ばせ、仰向けの体の腕に乗り、ポケットからナイフを引っ張り出して首筋に当てる。

それと同時に、瞬間移動のようなものを使ってリオは源太郎の目の前に来た。

「ヒヒヒ……。」

源太郎は、首筋にナイフを当てた状態で、奇妙に笑う。

対して恵はもう死ぬという状況に涙を流していた。しかも目の前には先程さんざん自分を罵^{ののし}って帰させた、もう親近感というかそういうものが湧かなくなった人間しかない。つまり、心は絶望一色だった。

その状況で、源太郎は勝ち誇ったように言う。

「さあ、どうする？いくらお前とは言えどもこいつを犠牲に出来るのかあ？」

脅迫にも受け取れる言葉に、リオは表情を変えない。
むしろ、笑っていた。

「この状況で、良くその台詞が吐けるものだな。」

何？と源太郎が言う前に。

「俺を誰だと思ってる？」

リオは言う。

「……現世で『煉獄』の刑罰を処する、神の遣い、カサティ||リオだぞ？」

そして、一瞬で間合いを詰め、両腕で源太郎のナイフを持つ腕を捻^{ねじ}

り切る。

その腕からはまた出血が。

「あがああああああっ！」

両腕を失った。しかし諦めない。

源太郎は、口でナイフを持ち、恵を殺そうとした。

勿論、恵はどうでもいいと思っていた。リオにも帰れと言われた。が、家族親戚を失った自分に帰る居場所などない。だったら、いっその事、死んでしまった方が楽だ。

そう思ったにも関わらず、リオは恵を助ける。

そんなに自分を苦しめたいのか。

そんなに自分は邪魔だったのか。

そんなに自分は不快な思いを与えたのか。

そんな考えが恵の頭をよぎり、涙を流す。

が、それを見透かしたように、笑みを浮かべて、それも『そうではない』と否定するような笑みを浮かべてリオは言う。

「……ここにいるお前を助けに来た。ただそれだけだ。」

「！！！」

思ってもみない言葉だった。

同時に、絶望一色だった恵の心に、希望の光が灯った。が、複雑な心境だった。先程罵られた男から言われたのだから。

「があああああああ！！！！！」

しかし同時に、半狂乱になった源太郎が突っ込んでくる。

が、リオは大した興味を持たないような口調で言う。

「もう終わりだ。死ね、屑野郎。」

リオは、燃える右手で源太郎に触れ、源太郎の体は燃え始めた。

「あぎっあああああああああああああああああ……！！！！！！」

絶叫。

ただそれしかなかった。

「ぐああああっ！た、助けて、くれ……！！」

源太郎はこの期に及んでまだ往生際の悪いことを言い放つ。

そして、この言葉でついに、恵の中で何かが切れた。

恵は、自分を殺そうとしたナイフを拾い、それで源太郎の右足に一回刺した。

骨に当たるまで、深く深く……。

それが、16歳である少女にとっての復讐の限界なのだろう。

「があああああっ！！！！痛い、痛いいいいいいっ！？」

源太郎ももはや正気でいられなくなっていた。
その辺りを転げ周り、痛みに悶えながら、数分後ようやく炭となった。

恵は、目の前の炭を前に、複雑な感情を抱いていた。
人を刺した罪悪感がまず浮かぶ。が、復讐を遂げたという達成感のようなもの、人が目の前で死んだという恐怖も浮かんできた。
何にしろ、恵は体をそれらによって震わされていた。

「……大丈夫か？」

リオが、右手に手袋をはめながら近づく。

「だ、大丈夫、よ……。」

「全然そうは見えないし、聞こえないけどな。」

そして、近づいたりリオにか細い声で聞く。

「な、何で……？」

「……？」

リオは首を傾げる。

そんなリオに、今度は涙を流しながら、怒りをぶつけるように言う。

「何で、私を助けたの!？」

それは、自分を罵ったのに、何で助けたという意味合いが強い質問だった。

しばらく、2人は黙っていた。
そして、

「……さあな。」

これが、リオの返答だった。

「俺は神の遣いだ。人の感情など分からん。」

「だったら、何でなのよ……?」

「だから知らん。……ただ。」

リオは、言う。

「何でだろうな、お前をこれ以上傷つてくなかった、とでも言え
ばいいのか? 奇麗事だが、これがお前を罵ってでも帰らせようとし
た理由だ。そして、そう思ったからこそ、お前が捕まったときに、
アイツを本気で殺しにかかったんだろうな。」

「……。」

その言葉に、恵は言葉を失った。

そして、ごめんなさい、と心の中で呟いた。

しかし、依頼は終わったのだ。

これで100円という安すぎる報酬と引き換えに、憎き者の心臓を受け取って、去ればいい。

いつもならそうなのだが、今回は事情が違った。

裁き、もとい殺人を目の前にして、さらに少なからずもその扶助をしてしまった少女は、立ち上がれなどしなかった。

そして、それ以外に、もう1つ理由がある。

「さあ、さっさと報酬を受け取って帰るといい。」

そう言ったりオの言葉に、恵は、ただ一言。

「だから、言ったでしょ、私、帰る場所が無いって……。」

そう。

今は炭でしかない源太郎に、親族などを殺され、ただ一人しかいない。

養子として預かってもらう手もあるが、このご時世、誰も信じられない。

つまり、もう帰る場所など、ない。

「……。」

それを聞いたリオは。

あの容赦なく裁きを与え続けてきたリオが。

何百、何千、いや、何億という罪人を葬ったリオが。

こんなことを言った。

「……だったら、俺の店へ来るか？」

「……………え？」

恵は突然の言葉に、理解が追いつかない。

それを察して、リオはもう一度繰り返してやる。

「だから、俺の店へ来て、一緒に住み、そこを新たな居場所とするという選択肢ならあるが？」

それは、裁きを与えるものにしては、案外にも優しい選択肢だった。そして、当然それ以外に為す術が無い恵は、その選択肢を受け入れた。

そして、分かったことが1つ。

この1件で、確実にリオの中の何かが変わった、ということだ。その正体を知るには、まだまだ時間がかかりそうだが。

そして、1年後。

まだ日本は腐りきっていたが、1年前よりは犯罪数は若干減った。現在も、カサティ||リオは店で『仕事』を請け負っていたり、次の『仕事』を確認したりしている。

その『仕事』とは、もちろん『裁き』のことであるが。本、『Urteil』を手に、次の裁き対象を確認する。

「……で、次は誰なの？」

「連続企業会社爆破事件犯人、おかもどわる岡本透だ。」

「ふーん……。」

会話をしているのは、居場所を与えられし者、星野恵。

現在17歳で、リオの仕事の報酬により辛うじて高校へと行っている。

しかし、今日は休日であるがために、この店に、否、家にいるのだ。

「しかしさ、こんなにほぼ不眠不休で働いてて大丈夫なの？」

恵が心配そうに尋ねる。

リオは、笑ってこう答えた。

「何を言うか。俺は神の遣い、言わば人間ならざる者だ。その程度の所業で疲れるわけは無い。」

「そっか……。ならいいけど。」

恵も笑って返した。

この店、前よりも幾分か雰囲気が変わった。

その原因は、勿論『恵』という1人の少女の存在だろう。

そして、もう1つ……。

「では、そろそろ『裁き』の時間だ。」
「うん……。」

本を閉じ、黒マントを羽織るリオを見て、1年経っても複雑な心境を抱いていた。

殺しの仕事へ行くことへの反感。

しかし、同時に恩人であるリオにはある種の好意を持っていた。

だが、それを表には決して出さない。

もう、これ以上、この人に迷惑をかけてはいけない。

そう思って、恵はこう言ってみ送る。

「じゃあ、行ってらっしゃい。」

「……ん、ああ。」

恵の笑顔の見送りという明るいものとは裏腹の仕事をするリオは、『仕事』へと出て行った。

今日も何処かで犯罪が起こる。

だが、犯罪を犯す者は、この青年が殺す。

痛みを十分に与えて、殺す。それだけが目的だった。

しかし、今は他の目的もある。

それは、あの少女の笑顔を少なからず守ることである。
だから、殺す。

神の遣いとして、罪人を殺す。

これが、他の目的であり、店の雰囲気が少しでも変わったもう1つの理由であろう。
店主が変われば、店の雰囲気も変わる。そういうことなのかもしれない。

一刻も早く、平和な国にすべく。

そして、あの少女の笑顔をいつも見届けられるように。
今日も……。

煉獄少年 —K a t h a r t i r i o— ○（後書き）

……言い忘れてました。

長いです。長すぎます。なにせ一万字超え（汗）

それでも楽しんでくださったたら幸いです。

楽しめなかったら、すみませんでした。

そんな小説ですが、今後ともよろしくお願いします！

もしも、世界が狂ったら　　＼Happy or Bad?　　＼（前書き）

2話目です。

今回は、残酷な表現はなるべく伏せたつもりです。
なので今回はマークはつけていません。

ですが、人によって気分を害する場合があるのでご容赦を。
それではどうぞ。

もしも、世界が狂ったら　　Happy or Bad?

はじめまして、だな。

……え？お前誰だよ、って？

まあ、答えるとするならば、悪魔だな、悪魔。

悪魔って知ってるか？この世に『奇跡』をもたらす存在さ。

『奇跡』って何か、って話だけど、例えば『死んだ人が生き返った』とか。分かりやすいだろ？

まあ、そんな感じで、俺はこの世界で『奇跡』を起こすことを楽しんでるんだ。

じゃ、今日はどんな『奇跡』を起こすとするか……？

case 1 『もしも、力があつたら…自我崩壊に関するレポート』

……また、盗られちゃったよ。

そう呟くのは、体育館裏にいるとある青年。名は田中剛三たなかこうぞうという堅苦しそうな名前だった。外見は、細身で背は少し高めの、傍から見たら病弱そうな人のようなものだった。

そんな彼の今の身は、殴られた痕と思われる痣が数箇所、体に出来ていて、持って来てたはずの財布はどこにも無いという状態だった。そして、汚い土の上に仰向けに倒れ、着ている服には同じ色の土がついている。彼の身なりとは裏腹に、空は青く澄んで綺麗だった。

まるで、彼を嘲笑しているかのような空だった。

実は彼、高校1年生なのだが、その学校が運の悪いことに不良が多かった。そして、外見同様にひ弱だということが分かってしまった

のか、毎日のように金を奪い取られるのだ。

金を持っていなければ顔面崩壊は当然だし、金を持っていれば全額盗られるし、金額が少ないと期待した金額分から持ってきた金額分を引いた数だけ殴られる。まさにどうしようもない状態だったのだ。

たまらなく、自分が悔しい。

毎日金を盗られ、殴られ。そんな毎日を過ごしている自分を殺したい。けど、そんな勇氣はない。

だったら。

もし、自分にあいつらをぶちのめす程の力があれば。

自分は、あいつらを同じ目に遭わせてやるのに。そう思った。

その時だった。

『……助けてやろうか？』

と、声がした。

どこからか、誰の声かは分からないが、確かに。

そんな声に、剛三は縋^{すが}るように、「ああ。」とだけ呟いた。

すると、その剛三の声に、『声』が答える。

『じゃ、助けてやるよ。お前が、今日の俺の第一の玩具だな！』

は？と声を出そうとした瞬間。

空に、1つの非常に複雑な模様をした魔方陣が現れ、そこからどす黒いレーザーが剛三に向かって容赦なく照射される。

突然の出来事であった。『声』に話しかけられてからわずか数秒。訳が分からなさ過ぎて、剛三はもはや理解が追いつかず、そのままレーザーを体に当てられることになった。

目が覚めると、彼を嘲っていた空の色ではなくなっていた。むしろ、彼の薄汚れた身なりを隠すかのように、辺りを黒く染めていた。

「……一体、何だったんだ……？」

目の覚めた剛三は、もう一度先の状況を整理してみた。

- 1…不良に金を盗られ、殴られて倒れていた。
- 2…その後、『声』が聞こえた。
- 3…魔方阵出現。
- 4…レーザー命中。

そして、現在。

ここまで考え、剛三は自分の体を見てみた。

特に変わりはない。普通の体だ。

では、一体あのレーザーは何だったんだろうか？

そんなことを考えながら、彼は暗闇の中、家路につくこととなる。

しかし、それがいけなかった。

当然では有るが、夜の町、特に誰も歩いていないような所は不良が集まり、皆で悪いことをしているものだ。

例えば、煙草を吸ったり、シンナーでも吸ってみたり、カツアゲでもしてみたり。

2番目は明らかにやばかった気がするが気にしない。

そして、剛三の帰り道には、運の悪いことに数箇所そういう場所があった。

更に、彼の外見も手伝ってそのまま通過を許されるわけもなく、2つか3つ目の路地裏にいた不良に襟首を掴まれて連れられた。そして、

「なあ、俺たち今金無いんだよ。だからさ、貸してくれないかなあ？」

俗に言う、カツアゲという奴にやられた。しかも、台詞も傍から聞かれたら笑い飛ばされそうなほど典型的なものだった。

そして、剛三は当然、

「……金はない。」

「嘘付け！持ってたんだろ早く出せやゴラァ！！！」

そう答えてもこう返ってくるのが定石。

しかし、無い袖は振れない。先程、学校で財布ごと持っていたかればかりなのだから。

また同じ返答をすると、

「デメエ、いい加減にしろよ！！！」

と、胸倉を掴まれて拳を振り上げられた。

ああ、また殴られるのか、と思い、そんな大声出して近所迷惑にならないのが不思議だ、とも思った。殴られるのに慣れると、2つ目のような思考が生まれてくるものらしい。

そして、不良は拳を振り下ろす。

当然、怪我は必死だった。

……が、剛三は不良の顔面を殴り飛ばしていた。物凄い力で。

それを悟るように、後方にあった壁には、マンガの如く人型の穴が空いており、その向こう側で不良は完全ノックアウトしていた。

続けざまに、『不良B』、『不良C』、『不良D』が現れたが、何だか分からぬが、とりあえず手を不良へと出す剛三の『会心の一撃』によって一網打尽にされた。まるで、レベル100の勇者がザコキヤラを一瞬で葬るかの如く。

そして、そんな非常識な力で、その後不良を10人倒し、事なきを得た。

「ち、チクショオッ！覚えてろよ！！」

そう言って、何とか立ち上がった数人の仲間が何とか撃沈している他の不良を背負い、不良たちは闇へと消えていった。

「…………え？」

そのボロボロの不良の後姿を見て、剛三は1人、間拔けた声を出した。

それはそうだ。剛三は、スポーツがそれほど得意でもないし、第一、習い事で何かスポーツをしていたわけでもない。それは一番最初にも同じようなことを述べたはずだ。

が、ついさっき、剛三は十数人の不良を『有り得ない力』で殴り飛ばしていった。

「これは、一体……？」

剛三は考える。

何故、自分はこのような力があつたのだろう。

と、直ぐに思い当たったのが、あのレーザー。

「……いや、まさかな……。」

そう呟きつつも、ふらふらと家路につく剛三であつた。

翌日。

この日も、青空が広がる快晴であつた。雲ひとつない。

この時ばかりは、空は剛三を嘲ってはいなかった。

そして、その空の下、家で剛三は学校の準備をし、財布も当然持ち、制服を着て、朝食を食べ、歯を磨いて顔を洗って……。

一般人のするようなことを淡々とこなしてから、剛三は学校へと向かった。

そして、学校。

剛三にとっては最早最も忌み嫌い、しかし行かなければならぬ場所となっていた。

これにより憂鬱な気分になっている剛三に、いかにも不良ですといった感じの男子生徒が声を掛けてきた。

「……今日もしっかり来いよ。」

それだけ行つて、その男はさっさと去っていった。

剛三はその言葉に溜息をつくしかなかった。

が、昨日とは少し気持ちが違うのも確かだ。

それは昨日の不良に快進撃を与えたあの件があったからだ。

だから、剛三の気分は今少し軽くなっていた。

そして、チャイムの音が鳴り、今日も新たな学校生活の1日が幕を開ける。

「それにしても、今日も退屈な授業だったな……。」

剛三は1人呟く。

それは、運悪く友人のいない、そして作れない『不良だらけのクラ

ス』だったからだ。

しかし、剛三はもうそんな状況に慣れてしまった。その為に今日の授業について考えることが出来るのだ。

因みに、今日の授業は、1時限目に体育、2時限目に数学、3時限目に古文、4時限目に芸術、5時限目に現代社会、6時限目に生物、となっていた。

このスケジュール、剛三にとっては凶と出たらしい。

が、今問題なのはそこではなかった。

「……今日も、行かなきゃならないのか……。」

そう、剛三は毎日のように財布から金を取られたり、暴行を加えられる。

それも、先生の絶対に来ないような場所で。

先生に見られてもばれぬ様に、顔面や服を着た際に露出して見える部分、例えば腕や足など、は狙わないようにしていた。

まったく、汚い奴らだ、しかし先生に言っても暴力の嵐が待つだけだし、と思いつながら、彼は今日も教室を出る。

不思議な力が出るのを望みながら。

そして、いつもの体育館裏。

そこには、10人程の不良が待ち構えていた。

「んで、今日は幾ら持ってきたんだ？」

不良の1人が尋ねる。

剛三は、財布を取り出し、不良たちに放った。

そして、突然の行動に財布を取ろうと追いかける不良達。その隙を狙って、剛三は逃げようとした。
が。

「おいコラ、ちょっと待てや。」

と、更に行く手を阻む不良に止められた。体格はガッチリしていて、プロレスラーにでもなれそうな程強靱そうに見える。
片手には鉄パイプを持っている。

これには反抗できないと悟った剛三は、ただ立ち尽くすしかなかった。

そして、後ろのほうで不良達が声を上げる。

それは歓喜の声ではなく、憤怒の声だった。

「おいテメエ！！空っぽとはどういうことだ！！！」

そう、財布の中は空だった。

剛三はそのまま逃げられれば損1つせずに逃げられると思ったのだが、今計画の全てが破綻した。もう死ぬ覚悟でもしなければならぬ状況に陥れられた。

「へっ、今日のところは半殺しで許してやるよ。おい、テツチャン！」

「へーへー。」

と、目の前の鉄パイプを持った男、テツチャンが剛三に向かって鉄パイプを振り下ろす。

これは死ぬな、と剛三が目を瞑った。

同時に、せめて、『こいつを殺せるほどの力があれば』とも思いな
がら。

その時。剛三はやけクソながら手を前へ突き出した。
瞬間。

ゴガン！と、

鉄パイプごと、テツチャンは飛んでいった。

そして、後方の体育館の机に激突し、思い切り背を打った。

「ごっ……！！」

テツチャンの肺の空気は全て出され、もはや悲鳴すら挙げられな
かった。

そんな状態の彼に、もはや危機的状況に理性を失った剛三は続けて
鉄パイプをテツチャンの手から奪い、顔を殴りつける。

剛三の細い腕に、一体何処からそんな力が出てきたのか、と疑う程、
テツチャンは頭蓋骨に輝を入れられながら横に飛んで行った。

そして、鉄パイプで殴られた衝撃で気絶したのか、悲鳴すら上げず、
グチャッ、という音と共にテツチャンは絶命した。

そこまでして、我に戻ったかのように、剛三は動きを止める。

「……あ……？」

剛三は、先程の一連の動作を思い出した。

そして、自分の手元にある、真っ赤に染まった鉄パイプを眺める。
自分は、今何をした？

それによって、どんな影響を及ぼした？
そして、この赤いモノは……！！！！！！！！！！

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！
！！！！」

「て、テメエ……。」

不良の声を無視して、教師の走ってくる音を無視して、哀れな青年は叫び続ける。喉が裂けそうな程。

自分は、人を殺した？

だから、赤いモノがついたんだ。

何だって、自分はこんな行動に及んだ？

分からない。分かるはずが無い。分かっていたら、こんなことするはずが無い。願ったはずだが、こんな結末は望んでいない！！

では、何故？

……そうか、あの『レーザー』だ。あれのせいだ。あれのせいで、俺は、俺は！俺は！！！！！！！！

……ヒトヲコロシタ。

コロシタ。コロシタ！コロシタ！！

ジブンハヒトヲコロセルタノシイモットコロシタイモットモットモットアカイエキタイヲナガメタイイマカラゼンインコロスコロスコロスコロス！！！！

そこから、『剛三』の記憶は無い。

あるのは、狂気に包まれた、血に染まった哀れな記憶だけだった。

あーあ。やっぱりこうなったか。

試してみる価値はあると思ったんだけどな。

力を与えすぎたら、ありえないキツカケで人間、吹っ切れるもんだな。

さてと、レポートでも書くか……。

……え？

その後、そいつがどうなったかって？

さあな。俺は、『与えられたものを人間がどう使うのか』を観察するのが趣味だからな。それが終わったら何も見ないんだ。悪いな。さてさて、これで今日の遊びは終わりだ。あまりやり過ぎても疲れるだけだしな。

『Report of No. 444 Devil』

I know if people get stronger, they can lose their reason. By this experience, I could prove this is true. But, human beings are foolish animals in spite of they can think better than any other animal. I don't understand yet why this is, so I believe the more I study, the more I know man new things. And I want to solve this question someday.

(悪魔番号444番によるレポート)

私は人々は強くなると、理性を失い得ると分かった。

この実験によって、私はそれが真であると証明出来た。

しかし、人間とは他の動物よりもよく考えることが出来るにもかかわらず、愚かだ。私はまだこれが何故か理解出来ないが、研究すればするほど新たに多くのことを知ると信じている。そして、いつかこの疑問を解決したいと思う。)

『

ふ)、とりあえず、基盤としてはこんなもんだな。

文法もあつてどうかかわかんねえけど、どうせアイツはそこまで

見ないだろ。

さてさて、加筆していくかね……。

The
End

もしも、世界が狂ったら　　＼Happy or Bad?　　＼（後書き）

まだまだ修正の余地があるので、その内直すことも考えていますが、いかがでしたか？

また訳のわからねえ事を、と思った方も多いのでは（汗）

そして、勘のいい人は分かったかもしれませんが、恐らくこれ、2
つ目も書きます。それがいつになるかは分かりませんが。

……次回こそは明るい話が書けることを祈りつつ、また次回へと続
きます。

予知少女 — Prediction — ○（前書き）

久方振りです。

今回は長いので、心してかかってくださいね？

では、どうぞ！

予知少女 — Prediction — ○

所は、アメリカ。

そこにある一軒の家。

「うーん……。 」

その家の寝室にて、伸びをしながら起き上がった少女がいた。

「うみゃー……。 眠いわねー……。 」

そう言っ、少女はベッドの傍らにある本棚を見る。

そこには大量の、様々なジャンルの本が並んでいた。といっても、主に論説文やライトノベルといった類だが。

そう、少女が眠いのはこれが原因。

超が幾つもつくほどの読書家。それにより、この少女は毎日寝不足なのだ。

「さてさて、今日も学校へ……。 」

と、ベッドから立ち上がろうとした時、バンと戸が開いて誰かが入ってきた。

うにゃあ！とか何とか奇声を上げながら、少女は突然の出来事に後ろにさがり、さらに頭を本棚にぶつけ、その為、本がばらばらー、つと落ちて、頭が本に埋もれてしまった。

「うう……。 」

「グッドモーニング！朝だよ朝！」

「うっさいわね！今下りるところだったのに、ビックリしたじゃない

い！」

「ああ、ごめんごめん。」

そういうのは、どうやら少女の姉らしかった。

そのためか、身長は少女よりも高く、ボディラインははっきりとしていた。一目で美人だとわかるだろう。

「とにかくっ！早く下りて来い、エレン！」

「ふあゝい……。リサ姉ちゃん……。」「そんな訳で、姉、リサ（17歳）と、妹、エレン（14歳）の日常が始まった。
父と母は、いない。

「ほらほら、早く飯食っちゃえよ！」

「いただきます。」

おう！と、リサがどこかの店の親父のように返事を返し、エレンはそれに従って、ハムエッグを食べ始める。

傍らにはシリアルがあり、牛乳が既に注がれていた。かなりオーソドックスな朝食だ。

「さてっと、あたしはそろそろ学校行くよ！」

「うん、ひっへはっひゃい（行ってらっしゃい）！」

「いよっしゃー！！！！今日も飛ばすぜー！！！！」

何故朝からこんなにもハイテンションなのか、リサはそれだけ言う
と、勢い良く家から飛び出した。それに対して、シリアルを口に頬

張るエレンはリサに行ってらっしゃいと言う。
なのに、リサがすぐ家に戻ってきた。

「だー！ バッグ忘れたー！」

「また!？」

エレンが苦笑しながらも、自分の隣の椅子の上にあった姉の鞆かばんを渡して、リサはまた出かけた。

「ふー。まったくおっちょこちよいなんだから……。」

笑いながらその情景を見て、自分の横をふと見て、気付いた。

椅子の上にあるのは、『姉の』鞆。
じゃあ、今渡したのは？

「……り、リサ姉ちゃー！ 待ってー！」

その後、爆走するリサに辿り着き、鞆を交換してもらって、とりあえず一件落着。

姉妹揃って、どこか間抜けだった。

だが、それが姉妹にとって日常で、それはこの上なく平和だった。

リサが出発してから30分後。

エレンも自らの鞆を持ち、家を出る。

その去り際、玄関にぽつんと置かれた写真。可愛い写真立てに入っているそれは、父と母のものだった。

「……。」

それを見て、病院での記憶がフラッシュバックするも、数秒で振り切って、戸を開ける。

「それじゃ、行ってくるね。」

エレンのその表情は、笑顔だったが、どこか悲しげな表情もあった。そして、しっかりと鍵を閉め、出て行った。

エレンは学校に着いた。

この中学校、結構広く、クラスは21も存在する。

その中でも、エレンは2年5組に所属している。

エレンは、扉を開け、教室に入る。

教室の中は、いつもと同じように賑やかだった。そして、

「あ、おはよ〜♪」

「おう、エレン！」

入室早々声を掛けてきたのは、友人のルーシーとロバートだった。

彼らは、小学校からの付き合いで、お互いの性格を良く知っていた。

「おい、そーいや聞いたかよ！」

「……何を？」

いきなりロバートが話題を持ち出したので、エレンが返してやる。
すると、

「最近ネットで話題になってる、呪いの本の噂！」

「え……、私、そういうの苦手で……。」

「へー、どんなのどんなの？」

どうやら、ロバートはオカルトものが好きらしい。
それに便乗するルーシーと、顔をしかめるエレン。
すると、ロバートは話し始めた。

「この学校の図書館に、とある分厚い本があるんだとさ。」

「うん、それで？」

「その本は、かなり昔のものらしくて、400年前に書かれたとか
言われる魔道書らしいんだよ。名前が『The Magic Bo
ok』。」

「で？で？」

「その本の内容が、これまた面白くてさ！」

ロバートが賑やかなクラスの中、携帯電話を弄繰り回し、とあるサ
イトを見せた。

「なんと、本には魔方陣みたいな変な紋章が描かれていて、その横
についている変な英文を自分の口で言うと、特殊能力が得られるら
しいんだ！」

「……そんな嘘臭い話、信じてるの？」

「おうよ！」

「馬鹿みたい……。」

「おいおい、それはないぜ！」

話がそろそろ終わると思った時、ルーシーが蒸し返す。

「で、その特殊能力って？」

「さあな、そればかりは憶測だらけで、どれが本物なのか分かったもんじゃないぜ……。」

「ほら、迷信じゃない。」

「……エレン、そうやってずっと反論してるってことは……。」

ロバートが意地悪そうに言う。

「……怖いんだろ？」

「こ、ここ、怖くなんか無い……！」

「そうかな？ エレンちゃん、結構動揺してるけど？」

「う、うるひゃいっ！」

エレンが台詞を囁み、顔が紅潮した。

それを見て笑う2人。

「笑うにやっ！……ひう……。」

「だから、動揺してるんだろ？ 囁み過ぎだって。」

「と、とにかく！ この話はお仕舞い！」

つまんねえの、とロバートが呟く。

そこで、ルーシーが別の話題を持ち出す。

言い放たれたのは、とてもショッキングな事実だった。

「そういえば、今日、数学のテストがあるんじゃないかったっけ？」

その言葉を聞き、今まで賑やかだったクラスが一瞬にして沈黙に陥る。

[illegible]

それもそのはず。あろうことか先生が通告を忘れ、ルーシーとその他2、3人しか、その先生が『明日、数学テスト有り』と書いたのを見ていないからだ。

しかし、どうこう言っても仕方が無く、悪あがきをするようにして勉強し、朝の時間は過ぎ行く。

「んじゃ、遅れるとまずいから、あたし行くね！」

「俺も行くとするか！」

「じゃ、あたしも……。」「

こんな感じで全員が集合場所へと急ぐ。

因みに、エレンは図書委員会に所属をしている。

図書室。

というよりは、図書館といった方が、規模の面では合っているかもしれない。それほど巨大だった。

そして、整然と並べられた大量の本に威圧感を覚え、荘厳たる雰囲気^{かも}を醸し出していた。

その雰囲気^{かも}をぶち壊しにかかったのは。

「いよっしゃー！今日もぶっ飛んで行くぞー！ー！ー！ー！」

……委員長なのに、暗黙のルールを破ってどうするんですか、とエレンは心の中で嘆息する。

現在、中学1〜3年の生徒で図書委員は僅か10人。巨大な面積にしては結構少ない。こんな巨大な場所の整理をしたがらない人が多いからだろうか。

とにかく、委員長が議題を話す。

「今日は、この図書館の在庫を確認してもらおうっ！！」

『は〜い。』

「よし、それではいざ出動！図書館隊員達よ！！」

『いつから俺（私）達は隊員になってるんですか！？せめて委員と
言って下さい！！』

全員で突っ込んだあと、結局渋々とエリア分けをして在庫確認を
することにしたのだった。

エレンは、ちょっと大きな目のノートを持っていた。

このノートは、どんな本があるのか一目で分かるよう全ての本が網
羅されている。

そして、エレンが担当する本のエリアは。

「宗教関連か〜……。」

何か、気分が萎^なえた。

当然であろう、朝の会話を思い出せば分かることだ。

さらに、あの後昼休みに無理矢理続きを聞かされた。

『その特殊能力が何とかって話だけど、例によっては人を呪い殺し
たり、未来を見たり……。』

覚えているのはそんなもの。

後の記憶は、恐怖一色に染まりっぱなしだった頭には無い。

（……ああ、もう！調子狂うから、さっさと仕事を……。）

その時だった。

本を整理しようとした時、偶然にも上から一冊だけ落ちてきてしまったのだ。

「あ、戻さなきゃ……。」

エレンはその妙に分厚い本を手に取り、元あった場所に戻そうとした。

したのだが、ふと、その手が止まり、その本のタイトルを凝視した。

「……っ！」

『The Magic Book』、と赤字で書かれた、古ぼけた漆黒の本だった。

こんな本、あったのだろうか？と、エレンは疑問に思い、早速在庫確認を取る。

ノートのページを捲^{めく}り、捲^{めく}っては捲^{めく}って……。しかし。

（見つからない……。？）

そう、そんな題名の本、この図書館にすら存在しないはずだ。

何だか、若干気味が悪くなって、その本を戻そうとする。なのに。

（スペースが無い！？）

その本は、確かに落ちてきたはずなのに、その本を仕舞う為の空間が、どこにも見当たらない。

本棚の上か、とも思ったが、本棚と天井が余りにも近づきすぎてい

て、そもそもそこに物を置く空間など、存在しない。

（じゃあ、どこから！？）

だんだん気味悪さが増してきた本を、もう持つてる気にはなれなかった。

エレンは、それを適当な場所に立てかけて、作業を続行する。

結局、終わったのは2時間後。

再び全員が集合し、委員長のやけにハイテンションな「解散っ！」という掛け声で、今日の委員会は終了した。

「あ、ごめん、待った？」

「ううん！そんなに待ってないよ♪帰ろう！」

「うん！」

終わった後に校門に行くと、帰る約束をしていたルーシーに会い、家路についた。

その途中で、『あの本』の話はしなかった。

もう、何だかあの本のことは忘れたかった。そう思ったからだろう。そして、ルーシーとも別れ、その数分後、家に着いたエレン。

家に着いた、という当たり前なことに、何故かいつも以上に安堵感

を感じた。

が、リサはまだ帰ってきてないようなので、自分で鍵を開けて入る。

「ただい」

しかし、そこで絶句する。

目の前に、あの古ぼけた漆黒の本が……!!

「い、いやあああああああ!!!!」

エレンは、乱暴にその本を掴み、外へ出た。
外へ出て、道路へと投げ捨てた。

その本は埃を被り、しばらくしてから、ゴミ収集車の運転手が、その本を発見したのか、ゴミとして収集車に入れた。

「な、何なのよっ……!!」

肩で息を切りつつ、家に帰る。

当然もう、そこには本は無かった。

その内、姉のリサが元気良く帰ってくる。

「うゝす、ただいまゝ!」

「お、おかえり……。」

エレンの元気の無さに、さすがにリサは尋ねてみる。

「ど、どうした？ 元気無いみたいだけど。」

「い、いや！ そんな事は無いよ！」

「そうか、ならいいが！！」

アッハッハ、とガキ大将が笑うようにして、雰囲気明るくした。無理矢理ではあったが、エレンにとってはそれは今、一番嬉しかった。

そして、夕食を食べ、話し、笑い、テレビを見て騒ぎ、風呂に入っ

て。そんなことをしていると、既に時刻は9時半頃を指していた。

「ううう……。」

自分のベッドに入り、少し目を瞑ってみる。

凄く、気持ち良い。

こんな気持ちに囚われたのは、久々だ。

今日だけでもオカルトチックな出来事に巻き込まれた。そんな非日常から、そんな記憶から抜け出したい、そんな気持ちがあったからこそその、『気持ち良い』なのだろう。

（でも、やっぱり私、ホラー系は駄目だー……。）

エレンはそんなことを考えて、苦笑する。
と、

「あ、明日の用意しなきゃ！」

そうして、帰ってきてからずっと自分の部屋に置きっぱなしだった鞆に近づき、明日の授業に使う教科書とノート^{あらかじ}を予めバッグの横に用意してから、開ける。

「へ？」

鞆に、何か黒い、大きなものが。

それは、今日だけでも神経をすり減らされた原因、あの漆黒の本だった。

「う、嘘！？何で！？」

動揺を隠せなかった。

おかしい、自分は確かに、その本を道路に投げ捨てたはずだ。大変迷惑な話だが。

それが、何故か自分のバッグに戻ってきている。

いつ、誰が、何処で、どの様にして入れたのか、全く見覚えが無い。

ホラー嫌いな少女、エレンは、もう耐え切れなかった。
リサの部屋に駆け込み、涙目でその本のことを話した。

「つたく、しゃあねえな……。」

そう言いながら、エレンの部屋に一緒に行ってくれた優しい姉だった。
が。

「……おい、そんな本、何処にあるんだよ？」

???

もはや、理解ができなかった。姉の言葉が。

リサが、返答の無い妹にもう一度問う。

「だから、そんな本何処にあるんだよ？」

エレンは、その質問に顔面蒼白となった。

辺りを見回しても、確かにそんな本存在しない。

「……なんだ、さてはあたしをからかったな？」

「ち、違う！そういう本が確かにここに……！」

「でも、ないじゃねえか。」

「う……。」

リサはため息をついて、自分の部屋に戻る。

そして、そこで、「おっ」と声を出して戻ってきた。

「もしかして、これか？」

「……。」

本は、いつの間にかリサの部屋に行き着いていた。
もはや、声にならなかった。

「で？どうする？読んでみるか？」

「やめてっ！」

エレンは、あらん限りの声でそう言い放ち、本をリサの手から奪い取り、窓から投げ捨てた。

「あ……。せっかく超能力を得るチャンスを……。」

しかし、リサはほとんど泣きそうな顔をするエレンに怒ったりは当然せず、とりあえず部屋へと連れて行く。

「しかしよお、あの本不思議だよな。一体どういう原理でこっちまで来てんだか……。」

「そうよ、確におかしいのよ、あの本。私の所に瞬間移動するみたいにな……。」

と、ここで何かが引っ掛かった。

「ん？待てよ。それってどういうことだ？」

「え？」

引っ掛かりを感じたのはリサだった。

リサはそのまま言葉を続ける。

「だっておかしいじゃねえか。何でエレンの所だけに瞬間移動して

来るんだ？」

「あ、確かに……。」

エレンは、それに疑問を感じ始め、その回答を思案する。
私に超能力を使わせる為？

私を恐怖に陥れるのに面白いと思ったから？

私が、あの本を最初にぞんざいに扱ったから？

理由は幾つも出てくるが、どれが答えか一切分からない。
とうとう頭を抱えてしまった。

「お、おいおい、そんなに考えなくても良いんじゃないか？」

「……うん……。」

「……もしもし？」

「……うにゃ……。」

「……1+1は？」

「……に……。」

「合ってる！合ってるけどまだ考えてる！？」

「……うきやーーーー！分からないーーーー！！」

「だ、だから、さっきも言ったが、そんなに考え込まなくても良いんじゃないか？」

「……う、うん、そうだね……。」

そうして、姉妹は結局そのまま寝て夜を過ごした。

その夜。

ヨメ……。

（ん？あれ？何、この声？）

ヨメヨ……、ボクノ『モンヨウ』ヲ……。

（だ、誰、誰なの！？）

ヨマナケレバ……、オマエヲ……。

（……ねえ、誰なの？）

ククク……、サアナ。

（ふ、ふざけないでちゃんと答えて！！）

トニカク、メヲサマセ、ボクノゴハン……。

（あっ！ねえ、あなたは、一体……！？）

エレンは、目を覚ました。

どうやら、夢を見ていたらしい。誰かに話しかけられる、そんな妙な夢だったが。

そして、そんなことを考えながら、目を開けると、

エレンの顔の上には、とあるページの開かれた本があった。
つまり、あの本の中を見てしまったのだ。

「!!!!!!!!!!」

あまりに突然の出来事、ましてや起きたばかりのボケーっとした頭だった為、それは強すぎる刺激だった。
数秒、本を凝視してしまい、その後ようやく本を顔から取り外して投げ捨てた。

「はあっ、はあっ、……な、何なのよ……。」

あの本を見てしまったからなのか、少し頭がクラクラしてきた。吐き気もする。

が、リサは気持ち良さそうに眠っている。エレンが本を投げたのも気付いていないようだ。

そして、現在まだ午前1時。

エレンは、再び睡魔に襲われて寝てしまった。

『なあ、その本、何処で見つけたんだ?』

『……その本って?』

『ほら、お前の後ろにある、黒い表紙の本。』

『ねえ、今日の昼食、一緒に食べない？』
『うん、いいよ。じゃあ、いつもの所で！』
『そうね。』

『うぐっ……。』
『だ、誰か！救急車を呼べ！！』
『苦しい、ぎあっ、あごがぐ……。』
『お、おい、大丈夫か！？おい！！』

『うわああああああっ！！』
『正面衝突だ！』
『誰か警察呼べ！』
『それより……。！！』

『おう、お帰り、嬢ちゃん。』
『……。誰？』
『誰？酷いな……。そんな酷い子には、』

オシオキダ。

「きゃああああああああっ！！！！」

次に絶叫しながらエレンが目覚めたのは、丁度いつもの時間だった。

リサは既に目覚めているらしい、隣にはいなかった。
しかし、エレンの叫び声のせいか、リサが飛び込んできた。

「だ、大丈夫か？エレン！！」

「う、うん、大丈夫だよ、リサ姉ちゃん……。」

息を切らしながら答えるエレン。

リサは、「そうか、ならいいが……。」「と言って朝食の準備へと戻ってしまった。

エレンは、リサと朝食を食べた。

いつもと違うのは、エレンが落ち込んでいくくらいか。

「……エレン、そんなに気にすることないって、あんな本。」

リサがそう言っても、エレンは少し体を震わせながら朝食を少しずつ食べていく。

リサも、そっとしておいた方がいいだろうと思い、朝食をがつがつ食べていく。

すると突然、エレンは食べるのをやめ、口を開いた。

「……ねえ、リサ姉ちゃん。」

「ん？何だ？」

と、エレンは昨夜起こったことをリサに全て打ち明けた。

リサは、あの本が少し不気味であることは知っていたので、それが恐らく本当であろうと信じた。

そして、エレンは全てを話し終え、こう言う。

「……ごめんね、朝からこんな変な話……。」

「いや、人に話したほうが楽だろうし、どんなに変な話であろうと話してくれたことには感謝してるぜ。」

リサは、エレンを安心させるような笑みを浮かべた。

エレンは、それで少し落ち着いたようで、ありがとう、と言ってからまた朝食を食べ始めた。

「さて、私はそろそろ行かなきゃマズいな……！じゃあな……！」

「うん、行ってらっしゃい！」

と、リサはバッグを持ち、学校へと走って向かった。

「……リサ姉ちゃん、ありがとう。」

そして、姉のいなくなった部屋で1人、そう呟いてから、自分も行く。こうとバッグを持つとする。

それは『エレンの』バッグではなく、『リサの』バッグだった。

「リ、リサ姉ちゃん……！！！」

結局、猛スピードで走る姉を追いかける羽目になったエレンだった。

暴走人間と化したりサに追いつき、それからようやく学校に行くも、当然ながらリサとエレンの学校が遠く離れているという理由により、遅刻してしまった。

その為、1時限目終了後、教師に呼び出されて説教を喰らった後、2時限目も遅刻して結局また説教を受ける羽目に。という訳で、エレンの心は早くも折れかかっていた。

「……うう……。」

「ど、ドンマイ、エレン。」

「そうだぜ、あんな奴ら、気にすることないって。」

「あ、ありがと……。」

しかし、心身共に疲れていたので、返事も元気の無いものになってしまった。

「じゃ、3時限目に急ぐか。エレンは何処だ？」

「ん？ここだよ……。」

「んじゃ、私たち急がなくちゃね。」

「そう、だ、な……。」

と、突然、ロボートの言葉が止まった。そして、エレンの方を指差して言う。

「なあ、その本、何処で見つけたんだ？」

「その本って？」

「ほら、お前の後ろにある、黒い表紙の本。」

エレンは、その言葉に背筋が凍った。

まさかと思って後ろを見ると、あの呪いの本がたたずんでいた。しかも、夢と全く同じ会話をしてしまった。

「いつ、いやあああああああああつ!!!!」

エレンは、その後本のページというページを破り捨て、残った表紙はグニャグニャに曲がった。

もはや本として機能しなくなった黒い物体は、エレンによって、窓から放り捨てられた。

そして、シヨックのあまり、とうとう倒れてしまったエレンは、そのままルーシーとロバートによって保健室に連れられた。

「ん、んう……。」

「お、ようやく気づいた。」

「エレン、大丈夫？」

「あ、ルーシー、ロバート……。うん、何とか……。」

エレンは、当然のことながら、普通に起き上がった。何せ、気絶しただけなのだ。それくらいは造作もないが、

「……………うっ!!」

突然、頭痛と共に脳内にこんな声が響いた。

ワルイコダ……。

ソナナコニハ、ヤハリ、ハヤメノオシオキダナ……。

「……？」

と、声が止む。

同時に、頭痛も収まった。

突然頭を抱えて苦しんだ友を心配し、声をかけてくれたルーシーとロバートには、「大丈夫。」と、笑顔で一言投げかけてやった。

この2人を巻き込むわけにはいかない。そう判断しての反応だったと、その時。

キーン、コーン、カーン、コーン……。

チャイムが鳴った。

そういえば、今何時なんだろう、と思って時計をしてみる。

そして、『12時30分』という数字を見て、驚愕した。

「え、ええっ！？もうお昼なの！？」

「そ、そうよ。その間、エレンっただらずーっと寝てるんだもん。心配で心配で……。」

「だから、俺達、その責任も兼ねて授業出てないんだ。ま、御蔭で楽できたからいいけどさー。」

「……何か、ゴメンね。」

「ううん、大丈夫だよ！そんなことよりさ、」

と、ルーシーは続ける。

「ねえ、今日の昼食、一緒に食べない？」

「うん、いいよ。じゃあ、いつもの所で！」

「そうね。」

「うっしや、それじゃ行くか！」

という訳で、早速3人は学食へと急ぐ。

しかし、

「……？」

妙に、今の会話に既視感を覚えたエレン。

しかし、少し考えてから、気のせいだろうと思い、そのまま2人を追いかけた。

学食。

エレンの学校のは、かなりの種類の料理が揃っていた。それこそ、全生徒の好みにはほとんど対応出来るほどに。

「で、何食う？」

「私は、ハンバーガーでいいかな……。」「

「じゃ、俺も。」

「私は、カレーで。」

そんな会話を繰り広げる3人。

そして、それぞれが料理をもらって、席に着く。
それから、各々料理を食べ始めた。

「おおっ！やっぱ美味いぜ、この学食の料理は！」

「そうね。意外に質が高いのよね。」

「うん、美味しい……。」

勿論、味はかなり美味だった。

その他の生徒も、ほぼ同じ反応を示している。

このまま、平和に過ごせればな、とエレンは思った。

その瞬間。

ガタン、と。

ルーシーが倒れた。

そして、首の辺りを押さえている。

「あっ、ガアアアッ……！！！」

「ど、どうしたの！？」

「ルーシー！？ルーシー！！！」

その突然の騒動に、生徒が徐々に集まり始めた。

「何だ何だ？」

「食中毒か？」

「おいおい、勘弁してくれよ……。」

「んなこと言ってる場合か！」

「うぐっ……。」

「だ、誰か！救急車を呼べ！！」

「苦しい、ぎあっ、あごがぐ……。」

「お、おい、大丈夫か！？おい！！」

と、その時。

エレンは、またも既視感に襲われた。

そして、その正体がようやく分かった。

昨夜の夢の中と、同じ会話だ。

全く、一字一句欠く事無く同じ会話だった。

その瞬間、エレンは恐ろしくなった。

と、なると、この後に起こることは……。

が、それを考える暇などなかった。

何せ、ルーシーが倒れたのだ。非常事態だ。あれこれ考えてる暇はない。

なぜならば。

「うっ……。」

「お、おい！？しっかりしろ！おい！！」

「嘘だろ……。」

「し、死んだのかよ……。」

有り得ないことに、ルーシーはそのまま息を引き取ったからだ。

その事実を突きつけられ、エレンは、自分が自分でなくなりそうな感覚を覚えた。

そして、

「いやああああああああああっ！！！！！！」

発狂にも似た叫び声を上げ、吐瀉を1回し、またも失神してしまった。

その後、エレンはロバートによって保健室に運ばれた。

そして、当然ながら、午後の授業は取りやめになってしまった。

その10分後。

「……んあ……。」

「あ、気がつきました？」

そこにいたのは、保健室の先生、アンナだった。

病気や怪我の治療のスペシャリストとまで言わしめている、非常に腕の立つ先生だ。病院にでも勤めればいいのに、というほどの名医だった。

「せ、先生……。」

「ん？どうしたの？」

「ロバートは……？」

「あら、帰ったわよ。何でも、荷物を運んでくれてるとか。それが

終わったら迎えにくるって。」

それを聞き、エレンは微笑んだ。

ロバートは優しい。そのイメージは大分昔からあったが、今も崩れることはない。

その微笑みに、先生は少し茶化してこう言った。

「あら、エレンさん。もしかして、ロバート君のことが好きなの？」
「へっ!？」

一瞬にして、エレンは顔を赤くした。

それを見て、先生は更に言う。

「あらら、可愛いわね♪」

「ちゃ、茶化さないでくださいっ!！」

今までそんなことを意識したことが無かったので、余計に心が不安定になってしまった。

顔の赤みは、未だなくなりそうにない。

その瞬間。

その赤かった顔が、一瞬にして青くなった。
そして、アンナに尋ねる。

「ねえ、先生。」

「何？」

「ロバートが帰ったの、いつですか？」

その真面目な口調に、さすがにアンナも真面目に答える。

「大体、10分位前ね。」

「……。」

何か、嫌な予感がする。

それを感じ取ったエレンは、突如、ベッドから飛び起きて、そのまま勢い良く外へと飛び出した。

「ちょ、ちょっと！エレンちゃん！？」

アンナは、エレンを止めようとしたのだが、それは叶わず、エレンはただただ走って行った。

そして、外に出て探し回ると、確かにいた。
数分かけて、ようやく見つけた。
ロバートを。

但し、『遺体』となって。

血まみれになって。

顔に表情はもう無い。いや、頭が潰れている。

恐らく、撥ねられた後に、続けざまに顔を轢かれて首をなくしたのだろう。

そのショッキングな光景に、立ちくらみすら覚えた。
そして、

「うわああああああっ!!」

「正面衝突だ!」

「誰か警察呼べ!」

「それより……!!」

そんな声が。

耳に入ってきた。

丁度、夢と同じ言葉だった。

もう、そこにいたくなかった。

いち早く、家に帰りたくなった。

エレンは、そのまま全力疾走で、家路に着いた。

泣きながら、叫びながら。

そして、家の前に来た。

ここが、今最も安心の出来る場所だった。

エレンはまだ泣きじゃくっていたが、その表情を直すことはしなかった。いや、出来る訳がなかった。

今日、なぜにか友人を2人も失ったのだ。正気でいられる訳がない。そんな状態で、家のドアを開けてみる。

勿論、頭がおかしくなりすぎて、いつもなら鍵がかかっていることを忘れていた。

しかし、

ギィ……。

ドアは、いとも簡単に開いた。
そして、そこには。

黒い男。

血まみれの姉。

暗闇。

鮮血。

鉄臭い匂い。

ナイフ。

臓物。

脳漿。

辺りにあったのは、そんなものくらいだった。
そこで生きている者は、勿論ただ1人。

「おう、お帰り、嬢ちゃん。」

「……誰？」

「誰？ 酷いな……。そんな酷い子には、」

エレンに対し、黒い男がニヤツと笑みを浮かべてこう言った。

「オシオキダ。」

その声を聞いた瞬間、エレンは硬直してしまった。
夢の中と、同じ声。

こいつは、あの黒い本そのものなのか。

それだけを理解し、疑問に思い、そして痛みと共に永遠に意識を失った。

「さあて、帰ってご飯を食べますか……。あとはまた、本にでも変身して、食料を得なきゃなあ……。」

それだけを呟き、男は、暗闇の中に、リサとエレンの死体を連れて、消えた。

そして、数日後。

「ん？何だ、この本……。」

とある少年が、路上で一冊の本を拾った。

その本の名前は、『The Magic Book』とある。

それが、黒い表紙に、赤い文字で書かれている。

そして、その本を、少年は興味本位で開けてしまった。

ククク。

ヨメヨメ、オロカモノドモ。

ソシテ、コノオレノ『ゴハン』トナレ。

それが、新たな惨劇の幕開けとなった。
そして――――。

予知少女 — Prediction — ○（後書き）

……実を言うところの話、だいたいのプロットは『煉獄少年』と同時期に成り立っていました。

それが、遅れに遅れて現在……。

まあ、出せたからとりあえずはいいのですが。

では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2460o/>

即興短編集！

2011年10月5日18時01分発行